

東京都のエイズの現状

(エイズ専門相談員から見える在日外国国籍感染者が抱える問題)

東京都福祉保健局健康安全室

内野 ナンティヤ・神谷 昌枝・飯田 真美

1 東京都のエイズ

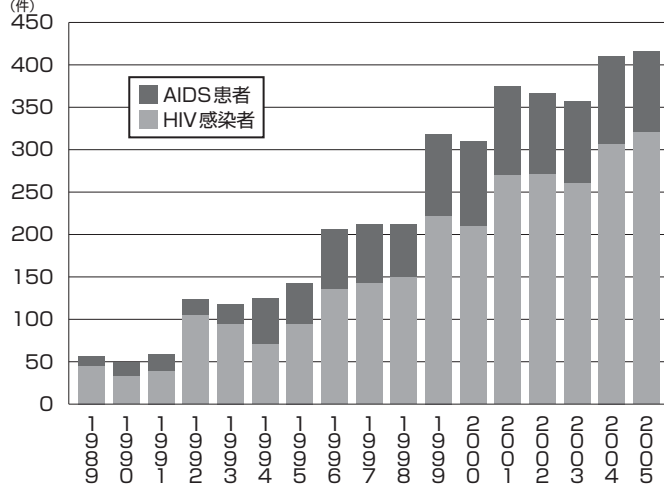
今や、世界中でAIDS(後天性免疫不全症候群、HIV(ヒト免疫不全ウイルス)によって引き起こされる)患者、HIV感染者報告数が増えている。

近年は、中央アジア、東アジアでも感染が拡大増加しているが、日本も例外ではない。

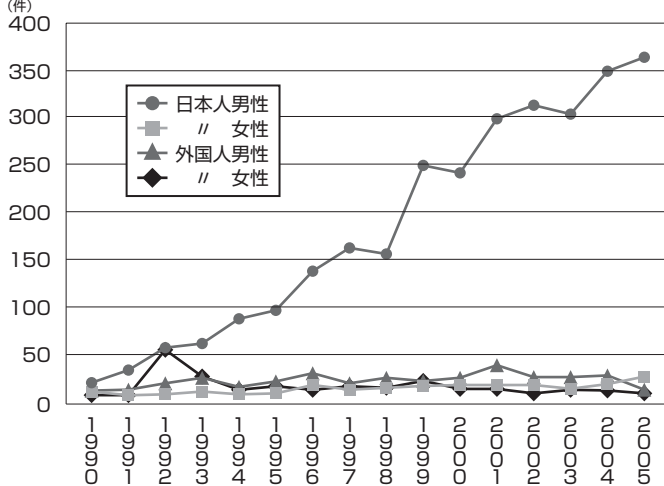
中でも、東京都は全国の報告数の約四〇%を占めている。東京都では、一日に一人以上のペースで、新規のHIV感染者・AIDS患者報告がある。

HIV感染者として報告されるのは、自発的または何らかの機会があつて検査をし、エイズ特有の症状が出る前に、感染が分か

東京都のHIV感染者・AIDS患者報告数の年次推移



HIV感染者・AIDS患者の国籍別・性別報告数の年次推移



った場合である。二〇、三〇歳代のこれから社会を担う年代に、多くの報告がある。AIDS患者として報告されるのは、免疫力が低下し、悪性腫瘍やニューモシスチス肺炎などのエイズ特有の症状が出ている場合である。無治療の場合、感染後、数年から十数年で発症するといわれており、それまでの間は、ほとんどが無症状である。このため、症状が出て初めて感染を知るケースも多い。三〇、四〇、五〇歳代の働き盛りの年代に多くなっている。

HIVの感染力は弱く、感染を成立させる量のHIVを含む体液は、血液、精液、

腔分泌液、母乳のみである。このため、感染経路は限られている。

感染経路は、性的接触によるものが全体の約九〇%を占めている。

HIV感染者・AIDS患者報告は日本国籍の男性で増加しているが、外国国籍の方の報告も毎年三〇件程度ある。

近年は、エイズ医療の進歩に伴い、早期発見・早期治療により、発病も長く抑えることができ、発病後もすぐに死に至る病気ではなくなっている。しかし、エイズ治療の医療費も高額で、服薬を始めると一カ月二〇万円程度の薬代が(自費の場合)かかるともいわれている。感染前とあまり変わらない生活ができるようになったとはいえ、日本人でさえ、感染後は定期的に通院をするとともに、職場、恋愛、家族関係などに悩みながら生活している方も多い。

また、国によっては、医療費や薬の種類の違いなどから、日本と同等の医療を受けられない場合もあり、帰国後も視野に入れた治療が必要である。

さらに、いまだ残る偏見・差別から、相談できる方も限られており、陽性者であることをほかの人に知らせずに生活している方も多い。

2 外国国籍の方々への対応

日本人への予防啓発も重要だが、外国籍

の方々への予防啓発、相談検査、サポートも重要になってきている。

そこで、東京都では、限られた予算の範囲内だが、外国語新聞へのエイズの予防や相談・検査についての広告を掲載するとともに、無料匿名でHIV検査ができる東京都南新宿検査・相談室では、通常英語対応を行っている。

感染後、心理的・精神的なサポートが必要に、英語やタイ語での対応可能なエイズ専門相談員を主治医からの紹介に基づいて、都内のエイズ診療協力病院等に派遣している。

・東京都南新宿検査・相談室(要予約)

TEL03・3377・0811

・エイズ電話相談(エイズ予防財団)

TEL03・5521・1177

(日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語、タイ語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語)

3 相談を通じて見えてくる在日外国籍感染者が抱える問題

外国国籍の方が感染した場合には、言葉、家庭、帰国などの問題を重層的に抱えるケースが多くなっている。ここでは、エイズ専門相談員の二人が、さまざまな問題の一部を紹介する。

また、相談、サポートには多くの情報が必要なので、情報収集も大きなウェイトを

占めている。生活関連の情報源などがあればご紹介いただきたい。

エイズを通してタイ人が抱えるさまざまな問題

内野 ナンティヤ

私はタイ語での対応を担当している。日本にいるタイ人の患者/感染者の相談を行っている。精神的なサポートだけではなく言葉の問題があると医療通訳もしている。また医療スタッフや大使館等の関係機関、NGO、NPOなどと連携をとりながら支援している。

相談の中で、タイ国籍の方や、今は日本国籍でもタイで生まれ育った方々が抱える問題は多種多様である。例えば、言葉の問題のみならず、経済的問題、滞在資格、生活、子育て、異文化や習慣の違いなどの問題がある。また精神的な問題は、タイ人という狭いコミュニティの中で病名を家族や仲間などに隠さなければならぬなどのストレスである。

フィリピンの方々は、週末になるとみんな教会に集まり、その場で友人や知り合

いなどと会い、互いに自分たちの生活や困ったことなどを話し合ったりしているが、タイ人はほかの外国人と異なり、このようなどことは無い。日本にもタイのお寺はあるが距離的には遠くて頻繁に行けないことなどから、タイ人は孤立する傾向がある。ましてや、HIVに感染すると、ますます孤独になる。

言葉の壁や文化的背景に加え、日本の生活様式や習慣などの違いで勇気や気力がなくなり行動範囲が狭くなることが、自立を妨げていく。抱えている問題を乗り越えようと努力して頑張っている人もいるが、あきらめる人も多い。

文化や言葉に加えて病気という複雑な問題を抱えているため、本人のみならず日本の家族へのサポートも必要である。しかし、文化、言葉の壁とエイズへの偏見から、相談できる友人もなく、さらに孤独になるという悪循環に陥りやすくなっている。そのため、最終的に配偶者に頼らざるを得なくなるが、配偶者には重荷になり、これがかえって夫婦の抱える問題を大きくさせてしまうのだ。ある配偶者は患者の文化や習慣などを理解せず、かえって言葉の暴力をしてしまう場合もある。患者はストレスを抱え我慢することになり、生きる気力を失うケースもある。相談や情報収集へのアクセスも困難だ。帰国希望の患者／感染者へは、母国の治療情報を提供したり、日本とタイの関係機関やNGOと連携し、無事

に帰国するための橋渡しの役割をしている。

日本で生活するタイ人の感染者が、少しでも安心して療養生活が送れるためにサポートをしている。

**エイズ専門相談を通して
見えてくる在日外国人が
抱える問題**

神谷 昌枝

東京都エイズ専門相談員として英語での対応を担当して約九年になるが、在日外国人感染者は、さまざまな支援を必要としている。具体的なかわりを通して、在日外国人感染者の抱える問題の一部を紹介する。

在日外国人感染者は、日本人なら普通に乗り越えることができる生活上の多くのことが困難になっている現状がある。例えば、薬の副作用で血糖値が高くなった方への食事管理については、通訳としてかわるだけでなく、食べ物の大まかなカロリーや塩分が記載された食品交換票の英訳を行ったたり、子どもの幼稚園入園を希望した患者のためには、幼稚園についての情報

の英訳が求められたりした。また妊娠した患者へは、英語での対応が可能な母親学級を実施している自治体を探したり、住居探しに苦慮していた患者へは、保証人問題を扱うNPOやアパート探しから大家との交渉までを手伝うNPOと連携をとり、無事にアパート入居までたどり着く、といったケースもあった。

また、病状やビザの関係等により、母国に戻ることを余儀なくされる患者に関しては、専門相談員の人的資源を通して、母国で活動している医師やNGOに連絡し、母国の最新の医療情報や心理社会的支援情報を提供し、帰国費用が不足している場合は、感染者に特化した基金に代理申請することも行った。

このように、在日外国人感染者は、HIVの専門相談のみならず通訳から必要情報の収集、英訳に至るまで幅広い支援を求めており、多機関との連携による柔軟な対応が必要となっている。

ブラジルでは、すべての新規感染者に必ずカウンセリングやソーシャルワーカーを会わせるなどケアを充実させることによって①二次感染予防を含めた感染予防、②早期に検査を促し早期からの健康管理により医療費増加を抑制、に成功した例もある。

日本においても日本人感染者のみならず在日外国人感染者のケアをさらに充実させ感染予防につなげることもますます重要になっていると考えている。